報　文

幸齢セミナーが大学生の高齢者に対する認知に及ぼす影響について －臨床心理コースの学生の場合－

利光　恵，長野恵子，花田利郎，池田美由紀

（西九州大学社会福祉学科）

（平成17年12月８日受理）

Influence of Experience of College Students' Experience in "Korei" Seminar on theim Cognition of the Elderly : A Case of Students of Clinical Psychology Major

Megumi TOSHIMITSU, Keiko NAGANO, Toshiro HANADA, and Miyuki IKEDA

(*Department of Social Welfare Saeice, Nishikyusyu University*)

(Accepted December 8, 2005)

Abstract

27 college students in clinical psychology major were assessed on self-reported cognitions of the elderly prior to and after the experiences in Korei seminar. As the result, there were significant perceptional changes among those students. The result indicates the experiences in Korei seminar are beneficial for college students in clinical psychology major.

Key words: cognition　認知
the elderly　高齢者
clinical psychology　臨床心理学

要　約

臨床心理コースに在席する学生２７名を対象に、『幸齢セミナー』体験の前後での高齢者への認知のあり方について、アンケート調査を行った。その結果、セミナー体験前後で、高齢者への認知に有意な差がみられた。結果より、臨床心理コースの学生に対して、『幸齢セミナー』は非常に意義ある体験であることが示唆された。

はじめに

近年、日本における高齢者の人数は増加傾向にあり、身体の健康度も良好な高齢者も増えてきている。財団法人長寿社会開発センターの平成３年度の調査結果によると、対象となった高齢者の80%以上が、現在の生活に満足しているという報告がなされている。この満足度には、身体の健康度、個人のアイデンティティーや自己受容、あるいは自己実現などの度合いが含まれるものであり、生活への満足度は、単なる身体の健康度だけでなく、精神的な充足感を伴うものであると言えよう。

そもそも社会的に高齢者と定義される65歳が、老年期のはじまりとされている。この時期になると、退職や子どもの独立、心身の機能低下など、いわゆる喪失と衰退への方向性が生じてくる。その一方で、成熟と充実への方向性を老年期に見出す立場も存在する。エリクソンは、老年期の心理発達課題を、自我の「統合 vs 絶望」と述べており、自分の築き上げた人生を、現在生きている世代の中で意味あるものとして受け止められることの重要さを提唱している。また、老年心理学の分野でも、サクセスフル・エイジングという用語が用いられるようになってきている。これは、老化の過程に上手に適応しつつ「何ができるのか活発に試してみる」余生の過ごし方を示しており、老年期に対するポジティブな印象が明らかになってきている。

以上の論点を鑑みると、これからの高齢化社会に対応する臨床心理学的援助とは、単に喪失と衰退にのみ着目したものではなく、いきいきした生活を高齢者自らが作り出すための統合、成熟と充実にも着目し、両側面を念頭に置いたものでなければならないであろう。

さらに高齢者心理援助に携わる場合、高齢者がそれまで生きてきた人生に対して敬意を払う姿勢が求められ、少しでもその人を歩んできた人生ごと理解しようと傾聴することが重要である。しかし、高齢者を理解するための傾聴とは、非常に難しい。高齢者への配慮について、黒川（1996）は、「高齢者のこころに、土足で踏み込むようなことは避けなければならない。他人に踏み込まれたくない過去の歴史があるかもしれないし、あって当然である」と述べている。高齢者臨床の場面でも、相手のことを知ろうという気持ちばかりに焦点が向いている援助者（以下セラピスト）は、侵入的な体験を高齢者に与えてしまう。その一方で侵入的になることを過度に恐れているセラピストは、相手の心に近づくことができないままになってしまう。以上のことより、高齢者の心理援助を行うセラピストは、相手の人生に敬意を払いながら接していくことの難しさを十分に理解し、相手を理解するための心理援助方法について研鑽に励むことが必要不可欠となる。

西九州大学では、臨床心理コースの学生に、臨床心理援助技術を直接指導すべく、学部３年生を対象に臨床心理学専門演習が設定されている。その演習の時間の一部に、高齢者心理援助技術体験をねらいとした、幸齢セミナーの運営が含まれている。

長野（2005）によると、当大学では、社会福祉援助技術を中心とした実践的な福祉の力を学生に養成することを目的に、平成元年６月より、地域の高齢者および介護者を対象とした「高齢者の心とからだを活性化する教室（高齢者教室）」が始まっている。この高齢者教室開催の目的は、高齢者をめぐる問題への関心が高まっている社会動向の中で、社会福祉の実践力を持った学生を育てるためには、外部施設での現場実習のみならず、大学内において直接高齢者と学生が関わり、より専門的に対人援助技法について教員が指導できる場があれば、という思いであり、福祉の臨床現場で即戦力、実践力をもった職員として学生を育成しようとする大学の具体的な姿勢が伺える。また教室開催により、大学に近隣の高齢者を招き、心身の健康を確保する援助を行うことになり、まさに大学の地域貢献を現実のものにすべく高齢者教室は開催の運びとなった。

平成元年度は教員２名の指導のもと年間５回から始まり、平成５年度より福祉レクリエーションが導入され、臨床動作法との２本立てでスケジュールが組まれるようになった。平成１２年度から化粧療法、平成１５年度からは調理教室が加わり、その活動内容はさらなる充実・拡充を示すようになった。

平成１６年度からは、より多くの学生に高齢者との交流する機会を提供するため、また参加高齢者に生涯学習の一環としてより一層のプログラムの充実を図るため、全学的な活動にすべく、「チャレンジ幸齢セミナー（以下、セミナー）」へ展開し、高齢者の参加者は約７０名で、２グループになり、９つの演習、教員１２名が交代で実施し、年間１２回セミナーが開催されることとなった。この９つの演習の１つとして、臨床心理学専門演習があり、臨床心理コースの学生が、高齢者に臨床動作法を行う実習を行っている。

先述したように、高齢者心理臨床に携わるためには、高齢者への認知が偏らず、多角的視点から心理面を捉え

ることが必要である。そこで本研究では、セミナーに参加した臨床心理コースの学生にアンケートを実施し、セミナー体験が高齢者に対する学生の認知に及ぼす影響について、

① 高齢者との同居の有無
② 学生の性差
③ 社会福祉実習体験の有無

の３点から検討を行うことを目的とする。

また、高齢者の心理援助技術を身につけた臨床心理コースの学生の育成を図るべく、今後の幸齢セミナーのあり方についても検討を行うこととする。

調査方法

平成１７年度チャレンジ幸齢セミナーに参加した、臨床心理コースの学部３年生２７名（男子学生５名、女子学生２２名）に対して、記名式の質問紙調査を実施し、全員から回答を得た。実施手続きは、高齢者のイメージについて調査した小川ら（2002）の質問紙（形容詞対２０項目：弱々しい－たくましい、貧しい－豊かな、厳しい－優しい、疎遠な－親密な、暗い－明るい、不満－満足、灰色－バラ色、無能な－有能な、小さい－大きい、主観的－客観的、憎らしい－愛らしい、非生産的－生産的、かなしい－嬉しい、依存的－自立的、きたない－きれい、強情な－素直な、不安な－安楽な、不幸な－幸福な、拒否的な－好意的な、激しい－おだやか）を使用した。質問紙の実施は、セミナーを行う前のオリエンテーション時に、１回目のアンケートを行い、２回目は、２回目のセミナー終了時に行った。

結　果

質問紙２０項目について「非常にそう思う」を７点、「かなりそう思う」を６点、「ややそう思う」を５点、「どちらでもない」を４点、「ややそう思わない」を３点、「かなりそう思わない」を２点、「非常にそう思わない」を１点として得点化した。得点が大きいほど、その高齢者イメージ項目に対してポジティブなイメージを強く認知していることを示す。これを高齢者認知得点と呼ぶ。

幸齢セミナーに参加した全学生に質問紙を配布し、回答の得られた９１部を因子分析の対象とした。共通性の初期値を１とし、主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転を行ったところ、５因子が得られた（Table 1）。

そこで、臨床心理コースの学生の質問紙２７部の内、記入漏れがあったものは分析資料から外し、２４部が分析資料になった。その資料を基に、高齢者との同居（有・無）、学生の性差（男・女）、社会福祉実習体験（有・無）と、セミナー体験の前後との間で高齢者認知得点に差が見られるかどうかを検討するため、各因子ごとに２要因の分散分析をそれぞれ行った。

まず高齢者との同居の有無とセミナー体験の前後での、高齢者認知得点について分散分析を行った結果、因子１『快活さ』において、セミナー体験前後で主効果（$F_{(1,21)}=46.501$）が１％で有意であった。さらに同居の有無とセミナー体験前後との間に交互作用が見られた（Figure 1）。

Table 1 高齢者認知尺度における因子分析結果

		F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	共通性
5	暗い-明るい	0.68	0.13	−0.02	0.32	−0.01	0.59
4	疎遠な-親密な	0.55	0.01	−0.01	0.02	0.30	0.40
14	依存的-自立的	0.52	0.18	0.03	0.04	−0.07	0.31
8	無能な-有能な	0.10	0.78	−0.10	0.14	0.05	0.65
12	非生産的-生産的	0.38	0.46	0.06	−0.06	0.19	0.40
7	灰色-バラ色	0.15	0.41	0.07	0.33	0.26	0.37
1	弱々しい-たくましい	0.33	0.41	0.23	0.19	−0.07	0.37
16	強情な-素直な	0.13	−0.15	0.77	0.09	0.12	0.66
10	主観的-客観的	−0.15	0.07	0.59	0.05	0.07	0.38
13	かなしい-うれしい	0.35	0.23	0.40	0.23	0.09	0.39
6	不満-満足	0.18	0.33	0.37	0.17	0.23	0.37
18	不幸な-幸福な	0.08	0.16	−0.05	0.68	0.25	0.56
17	不安な-安楽な	0.15	0.00	0.19	0.51	0.08	0.32
15	きたない-きれい	0.04	0.26	0.34	0.46	0.09	0.41
20	激しい-おだやか	−0.04	0.02	0.11	0.14	0.74	0.59
19	拒否的な-好意的な	0.36	0.18	0.13	0.39	0.60	0.69
11	憎らしい-愛らしい	0.05	0.33	0.25	0.16	0.46	0.41
	固有値	4.68	1.84	1.43	1.27	1.18	
	寄与率（%）	24.45	7.89	5.59	4.64	3.68	

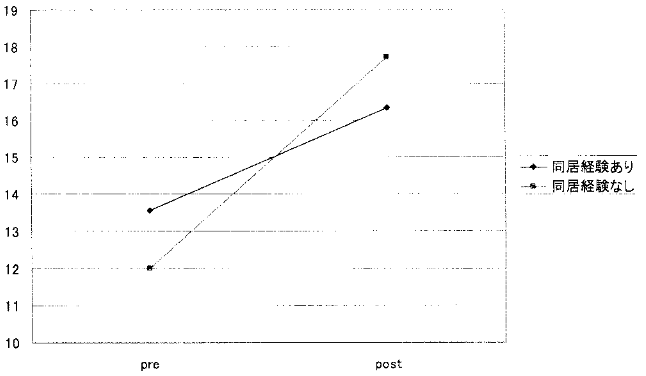

Figure 1 「快活さ」因子における同居経験別の高齢者認知得点（平均）

また因子２『生産性』において、セミナー体験前後で主効果（$F_{(1,21)}$＝31.654）が１％で有意であった。さらに同居の有無とセミナー体験前後との間に交互作用が見られた（Figure 2）。

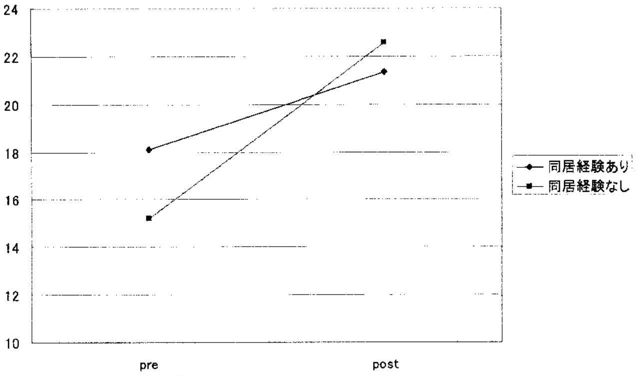

Figure 2 「生産性」因子における同居経験別の高齢者認知得点（平均）

因子３『思考の柔軟性』では主効果（$F_{(1,21)}$＝86.760）が１％で有意、因子４『幸福感』では、主効果（$F_{(1,21)}$＝23.980）が１％で有意であったが、交互作用はともに認められなかった。

因子５『親近感』では、セミナー体験前後で主効果（$F_{(1,21)}$＝22.220）が１％で有意であった。さらに同居の有無とセミナー体験前後との間に交互作用傾向が見られた（Figure 3）。

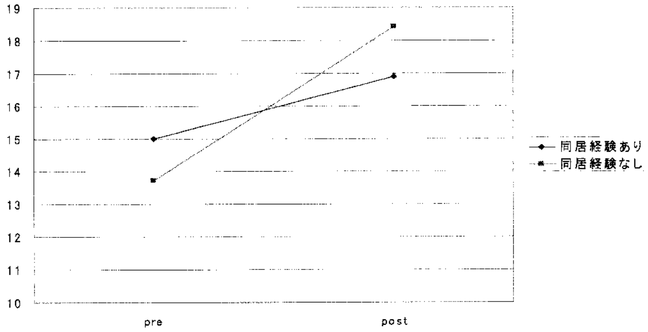

Figure 3 「親近感」因子における同居経験別の高齢者認知得点（平均）

次に学生の性差とセミナー体験の前後での、高齢者認知得点について分散分析を行った結果、因子１『快活さ』において、セミナー体験前後で主効果（$F_{(1,22)}$＝33.584）が１％で有意であったが、交互作用は見られなかった。因子２『生産性』では、セミナー体験前後で主効果（$F_{(1,22)}$＝21.717）が１％で有意であったが、交互作用は見られなかった。因子３『思考の柔軟性』も、セミナー体験前後で主効果（$F_{(1,22)}$＝55.771）のみ１％で有意であった。因子４『幸福感』では、セミナー体験前後で主効果（$F_{(1,22)}$＝11.066）が１％で有意で、性別とセミナー体験前後との間に交互作用傾向が見られた（Figure 4）。

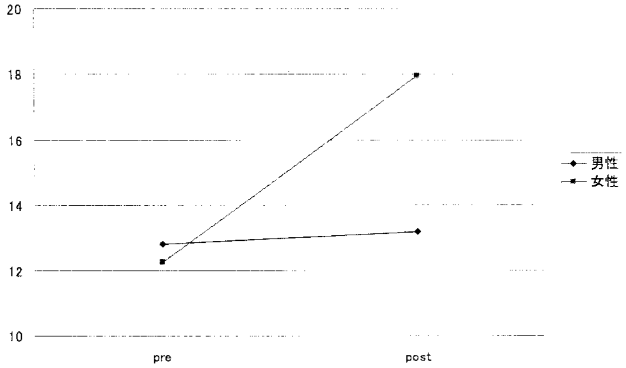

Figure 4 「幸福感」因子における男女別の高齢者認知得点（平均）

因子５『親近感』では、セミナー体験前後で主効果（$F_{(1,22)}$＝13.656）のみ１％で有意であった。

最後に、社会福祉実習体験の有無とセミナー体験の前後での、高齢者認知得点について分散分析を行った結果、因子１『快活さ』において、セミナー体験前後で主効果（$F_{(1,21)}$＝32.074）が１％で有意であったが、実習体験の有無とセミナー体験前後との間に交互作用は見られなかった。次に因子２『生産性』だが、セミナー体験前後で主効果（$F_{(1,21)}$＝46.501）のみ１％で有意であった。因子３『思考の柔軟性』、因子４『幸福感』ともに、セミナー体験前後で主効果が１％で有意だったが、交互作用は見られなかった。因子５『親近感』では、セミナー体験前後で主効果（$F_{(1,21)}$＝32.074）が１％で有意で、社会福祉実習体験の有無とセミナー体験前後との間に交互作用が見られた（Figure 5）。

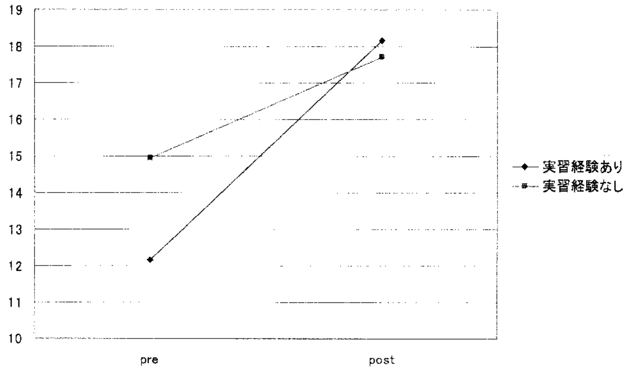

Figure 5 「親近感」因子における実習経験別の高齢者認知得点（平均）

考　　察

結果より、全ての因子に関して主効果が見られた。このことより、幸齢セミナー体験が、学生の高齢者に対する認知に影響を与えていたことが明らかになった。

さらに詳細に検討を行っていくと、高齢者と同居している学生と、同居経験のない学生では、因子１『快活さ』、因子２『生産性』において、セミナー体験前後における高齢者認知得点に差が見られ、同居している学生に比べ、同居していない学生の方が、セミナー体験前よりも体験後に、高齢者の快活さを高く認知していることが明らかになった。結果より、同居経験のない学生は、高齢者の『快活さ』や『生産性』について認知しづらいが、幸齢セミナーで、高齢者とともに活動を行う体験を通して、ポジティブな側面に気づくことができたため、認知も好転したと考えられる。

近年、核家族化が進んでおり、これからの大学生は、ますます同居経験が減り、高齢者のポジティブな内面を日常生活で認知することが難しくなると考えられる。そういった学生に対して、幸齢セミナーでの体験は、臨床心理学的視点を構築させる絶好の機会であると推察される。

また、因子５『親近感』にも交互作用傾向が認められた。これは、同居経験のない学生にとって、臨床動作法を行った体験が影響していると思われる。臨床動作法とは、援助者と被援助者が、体を媒介にして課題動作を遂行していくものであり、まさに共同作業を行っているプロセスを体験できる技法である。そのため援助者は、言語的やりとりでは感じることのできない、微妙な相手の感じ方を体を通して感じ、推察し、働きかけるプロセスを展開していかねばならない。そこに至るまでに悪戦苦闘はあるものの、その敬意を経て、相手の体の感じを一緒に同時に感じることができるようになると、まさに一体感を体験することになる。

今後は、他の演習の学生との比較を行い、援助技法の違いによって、高齢者認知構造に違いをもたらすか、さらに検討を深めていくことが望まれる。

次に、学生の性差とセミナー体験の前後に生じた高齢者認知得点の差についてだが、因子４『幸福感』で、性別とセミナー体験前後との間に交互作用傾向が見られたことは、特筆すべき点であろう。結果をより詳細に検討すると、この因子は『幸福な』、『安楽な』、『きれい』という形容詞が集合したものであり、セミナー体験前後で、男子学生より女子学生の方が、有意に高くなっていた。結果より、女子学生は加齢へのイメージをネガティブに捉えていたが、高齢者と接する中で、加齢へのイメージがポジティブへと変容したと考えられる。この有意な差は、高齢者自身にも考えられるため、今後は高齢者自身に『幸福感』についての質問を行い、性差の有無を検討することで、高齢者の性差に対応した援助開発の必要性を検討することが可能となるであろう。

最後に、社会福祉実習体験の有無とセミナー体験の前後での、高齢者認知得点の差についてであるが、因子５『親近感』で、交互作用が見られた。結果より、社会福祉実習体験をした者は、セミナー前の認知得点が低く、セミナー体験後は、まだしていない者に比べ高かったことが明らかになった。これはおそらく、社会福祉実習体験によって、相手のことを考える際に非常に慎重に構えるようになったと考えられる。つまり、相手に会ってみないと分からないという気持ちから、セミナー前の認知が低くなったのではなかろうか。そして、実際に会ってみてから緊張が解け、高齢者への好意的な認知へと変容したと推察する。この慎重さは、心理臨床家として先入観を持たずに相手に会おうとする姿勢を持つために重要な要素にもなると考えられる。このことより、当大学のように、学科内に４つのコースが設置されている場合、それぞれの実習が互いに影響を及ぼす可能性が示唆されるので、互いに連携をとり、それぞれの実習内容や指導についての連携をとっていくことが重要である。

今後の課題

今回、臨床心理コースの学生を対象に、幸齢セミナーが大学生の高齢者に対する認知に及ぼす影響について、アンケート調査を実施した。その結果、セミナー体験前よりも体験後で、高齢者に対する認知はポジティブ方向に変容していたことが明らかになった。さらに、

・高齢者との同居経験がない学生は、経験ある学生よりも、セミナー体験後に、高齢者の『快活さ』、『生産性』を強く認知するようになり、『親近感』を持つようになった。
・男子学生に比べ、女子学生はセミナー体験後に、高齢者の『幸福感』を認知する傾向にあった。
・社会福祉実習経験のある学生は、実習前の学生よりも、セミナー前に高齢者を距離ある存在と認知していたが、セミナー後には高齢者を『親近感』ある存在と認知するようになった。

という変容が明らかになった。

以上の変化より、幸齢セミナーが大学生の高齢者に対する認知への影響は、かなり広範囲に渡ってポジティブに及ぼしていること推察され、当大学のセミナーが、高齢者心理援助を担う臨床心理コースの学生に、有用な実践効果をもたらしていることが明らかになった。

今後の課題としては、今回の変容過程は、臨床心理コースの学生に特有なものであるか、学生全般的に言えることなのか、さらに調査を継続し、西九州大学独自の学生

育成の一示唆を呈示できればと願っている。

また、社会福祉実習を済ませてセミナーに参加した学生の方が、セミナー体験前では、高齢者に『親近感』を感じにくく、セミナー後は『親近感』を強く感じていたという、興味深い結果が示された。結果より、実習経験で相手を冷静に見ることの重要さを学び、担当の高齢者と会う前には、距離をとって捉えようとしていた姿勢の現れではないかと考察した。しかし、今回のアンケートは、数値の変動で認知を捉えようとするものであったため、今後は内省を自由記述で回答させるなど、アンケートの改変を行い、社会福祉実習と臨床心理実習でもあるセミナーとのよりよい連携のあり方を考察していきたい。

次に、今回のセミナーでは、臨床動作法という体を媒介にした直接的な援助法を実施・指導した。この援助法が持つ力動が、学生の認知変容に影響を与えた可能性も考えられる。そのため、他の技法で関わった場合との認知変容の比較を行い、高齢者の心理援助に、臨床動作法がどのように活用できるのか、その技法を学生に指導する意義も含めて、今後さらなる検討が必要と考えられる。

以上のような検討をさらに行い、サクセスフル・エイジングという、老いを上手に楽しみつつ「何ができるのか活発に試してみる」余生の過ごし方を援助できる学生の育成、幸齢セミナーの発展を目指していくことが急務であろう。

謝　辞

今回の論文を執筆するにあたり、データ入力の補助を快諾していただいた、西九州大学大学院健康福祉研究科臨床心理コース修士1年の平石淑恵、福島典子両氏にお礼を申し上げます。また、幸齢セミナーに精力的に参加した、社会福祉学科、健康栄養学科両学科の学生諸君に感謝を述べます。最後に、幸齢セミナーを毎回楽しみにお越し頂く、我々の人生の師である高齢者の方々に、これまでの感謝とお礼を申し上げると同時に、これからの人生がますます活力あるものでありますよう祈念いたします。

参考文献

高齢者の精神構造的、心理学的、社会学的生きがいと健康づくりの調査研究報告書　I
財団法人　長寿社会開発センター　平成3年3月
健康福祉実践センター活動報告書
西九州大学　平成17年3月
小川亜矢・深江久代・三輪眞知子・今福恵子　看護学生の老人イメージに関する研究－入学時、老人看護実習終了後の比較－
静岡県立大学短期大学部特別研究報告書
（平成13・14年度）1－21
岩月宏泰　ホームヘルパー研修受講者の職業志向に老人感が与える影響
保健の科学　第43巻　第10号　2001年
吉田有夫　黒柳淳　櫻井理恵　椿ますみ　杉本百合香ホームヘルパー実習前後の高齢者に対する意識変化
一宮女子短期大学研究報告　第40号　2001年
麻生武　浜田寿美男（編）　2005年　よくわかる臨床発達心理学　ミネルヴァ書房